碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可
神奈川　碩心会　発行

62年11月分（184号）
発行者　根岸岳萃
編集者　中村愛岳

62年10月現在会員数

逗子地区	175名
葉山地区	279名
大船地区	61名
（合計）	（515名）

再度の出会い

逗子A　草柳　武夫

昭和十六年、国情騒然とした中で、中学の詩吟部に入りました。戦闘機に乗りたくて、士気高揚の一助にという動機でした。胸部失患で不合格になり、その坐折感から一年で詩吟も途切れました。

以来四十七年間、遠ざかっていましたが、中山志泉氏との出会いから、再び此の道に入る事が出来ました。幸運は重ねて来るもののようで、松井正風先生の御指導を受け、更に、後進の私の進況を心から喜んでくれる良きお仲間にも恵まれています。

右の次第で、正に励まざるべからずと、練習日が待遠しい昨今の、初々しい新人であります。よろしくお願い申し上げます。

歴史の観方は色々あるものでしょうが、私はロマンチシズム的に観る事を好み、従って、此の道は、私にピッタリです。

先人が情熱を燃やして詠いあげ、現在まで残った名詩を、祖宗範創始による、格調高い節調で学ぶ事は、これからの人生に、大変な充実感を与えてくれる事でしょう。とは云え、かなり蓑のたった新人…去る審査会後の講評で、根岸岳萃先生が、新人は〝迫力〟をと要望された事を、深く心に留めて、誠実に吟じてゆく事を誓って、お近づきの御挨拶といたします。

第43回 神奈川県本部大会終る

62年10月10日(祭)横須賀市文化会館に於て行われ、碩心会から左記の方々の出吟、演がありました。

独吟・静夜思	新井瑞山
合吟・常盤孤を抱くの図	矢嶋悦岳他
独吟・山行	石渡桂岳
独吟・忍字に題す	南部越岳
独吟・涼州詞	渡辺秀岳
独吟・新涼書を読む	森田暁岳
合吟・常盤孤を抱くの図	千葉香岳他
コンクール・偶成	村田瀞岳他
詩舞・月夜独り座す	舞　杉本恵風
〃	中村三代
合吟・述懐	吟　加藤圭岳
詩舞・花の衣笠	舞　小峰桜岳他
	吟　中村京愛他
詩舞・〃	舞　鈴木翠風
	〃　正藤鷹山
	舞　千葉佳香他
	吟　竹内竹風
	〃　高梨邦風

合吟・神州　三井岳瓏他
独吟・新涼書を読む（常任理事）加藤岳相
〃・東坡赤壁の図（相談役）松井岳洋
〃・偶成（副本部長）根岸岳萃
（以上・ブロ順）

奥伝合格（十月一日付）

286 沼田昇風　300 西岡清風　312 松崎艶風
313 菊地高風　315 鈴木南風　316 加藤美風

碩心会　初吟会のお知らせ

と　き・63年1月17日(日)
ところ・京急ビーチセンター
（担当）堀内・上山口・星山

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡　子規

「子規全集」所収。明治二十八年作。「法隆寺の茶店に憩ひて」とある。子規といえばこの句があげられるほど有名だが、何の造作もない即興の作。どこか間が抜けているようにさえ見えるのに、実際は大和の秋の道具立ても揃っている上、明朗な点が愛されるゆえんだろう。子規自身は同年春喀血、夏まで神戸や須磨で療養していた。すでに宿痾(あ)の背椎カリエスによる腰痛に苦しみ始めていた。（折々のうた・大岡信より）

第21回葉山町文化祭
詩吟・詩舞の会を終えて

一色A　秋吉　笙風

葉山町文化祭協賛の「詩吟・詩舞の会」が十一月三日行われました。午前八時半、会場の葉山小学校体育館に役員の方たちが集合し、責任者の指図で紅白のまん幕を張り、椅子を列べ、マイクのテストも終えて、手際よく準備は万端整いました。

朝から出足もよく、客席がほぼ埋まって九時半に開会。思いがけぬ開会挨拶の大役にとまどいながら「日頃の練磨を遺憾なく発揮されて、楽しい一日をお過し下さいませ」と結びました。

私もプログラムの進行係をつとめましたが、皆様の熱吟・美吟に酔って度々お役を忘れるほどでございました。小学生が、かわいい口を大きく開けて吟ずるのをみて、上達も早いだろうなと、漢詩の暗誦に苦労する自分を省みて、羨ましく思いました。また高令者の方が背筋をすっきり伸ばして、しみじみ聴かせる吟詠をされるのをきき、自分もあのように老いたいものと感じ入りました。趣向を凝らした詩舞もまた、祝いの詩舞から、山中四季へ、息もつかせぬ構成でした。

碩心会葉山地区の方々が一堂にお集まりになるのはさすがに壮観で、年ごとにお顔見知りも増し、また新しく入会なさった知人を会場でお見かけして、自分の世界が少し広くなったように嬉しい気持ちでした。

プログラムが終りに近ずき、高段者の吟詠はさすがに素晴らしく、目をとじて聴いていますと、作者の気持ちが側々と伝わってくるようでした。また指導者の先生方の吟詠は一堂を魅了して、いつまでも耳の奥にじーんと余韻を響かせるようでした。

閉会は予定通り午後四時で、上村象風さんの閉会挨拶で幕がおりました。

私ごとで恐れ入りますが、今年は私にとっては、わけて思いが深いものでした。姑は吟詠が好きで、私の練習をいちいち聴いてくれ、初歩から「そこの辺は思い入れが足りないね」とか「とても良くなったよ」など、絶えず励ましてくれましたが、昨年秋に八十五才で亡くなりました。

夫が学生時代には、全国吟詠大会に出吟するくらいでしたから、姑は「きき何段」と自分でもいっていましたし、私の吟詠には何より力強い協力者でございました。今年は心の中で「お姑さん、どうぞ聴いて下さいよ」と、恩愛の姑へ捧げるつもりで吟じつつ、涙のこみあげる感慨を覚えました。

秋と月

秋といえば月…冴え冴えとした月の光に照らし出された秋の夜の趣きは格別で、秋を詠んだ詩に月はかかせないもののようである。

今月も記事を埋めるのに、ふと思いつき新教本1巻〜5巻をめくり、私達に比較的馴染のあるものの中から、秋と月を詠んだ詩をひろい出してみました。

秋日友人に別る(1/15) 九月十三夜(1/20) 武野の晴月(1/23) 峨眉山月の歌(1/98) 月夜三叉江に舟を泛ぶ(2/8) 夜墨水を下る(2/9) 新涼書を読む(2/20) 静夜思(2/89) 山中の月(2/99) 江月(3/8) 月夜独り座す(3/13) 秋夜(3/24) 十五夜月を望む(3/60) 山中の月(4/7) 他。

峨眉山月の歌

峨眉山月半輪の秋
影は平羌江水に入って流る
夜清溪を発して三峡に向う
君を思えども見えず渝州を下る

峨眉山上に半輪の月がかかり、その月の光が平羌江の水の上に映って、ちらちらと流れていくように見える。私は夜中に清溪を舟出して三峡に向かっていく。やがて山がせまり、岸がそびえるにつれて、月はいつしかかくれ、あの月を見たいと思ったが、ついに見ることができず、渝州に下っていく。

(峨眉山) 四川省の名山。標高三〇九九米。(半輪) 半円。(影) 光。(平羌江) 別名青衣江といい、峨眉山の北を流れ、大渡河に注ぎ、その大渡河が岷江に合流している。岷江は、長江の支流。(清溪) 宿場の名。大渡河と岷江との合流点から下流へ少し下ったところにある。峨眉山の東南。(三峡) 長江が四川省から湖北省にかけて、両岸に山がせまり峡谷が形成している所で、瞿塘峡、巫峡、西陵峡を三峡という。(君) 月を指す。(渝州) 今の重慶。

この詩は李白の傑作中の傑作といわれている。その理由の一つは、峨眉山、平羌江、清溪、三峡、それに渝州という固有名詞を五つも使っているものの、それらがめざわりとならずに、かえって詩のイメージを作り出していること。例えば、峨眉山は高山を、平羌江はゆったりとした流れを連想させる。清溪といえばすがすがしい雰囲気が漂ってくる。また眉、平、清の文字が、月の縁語にもなっていることも注目しなければならない。つまり固有名詞の文字の効果を巧みに生かしているのである。

夜墨水を下る

服部南郭

金竜山畔江月浮ぶ
江揺ぎ月湧いて金竜流る
扁舟住らず天水の如し
両岸の秋風二州を下る

浅草待乳山のほとりの隅田川には、折しも澄みわたった月影があざやかに浮び、川の流れが揺らぐにつれ、月光が湧き出て、あたかも竜が流れているよう。自分を乗せた小舟はただ一色、空や水ともわかたぬ水路を両岸から吹きくる秋風に送られて止まるところを知らずに流れ下っていく。

(金竜山) 浅草寺の東北の隅田河畔にある待乳山の異称 (江月) 江上を照らす月 (扁舟) 小舟 (二州) 武蔵・下総の二国。隅田川は昔はこの二国の境、つまり隅を流れていたのでこの称が起こった。この川のことは、古く「伊勢物語」に見えている。二国にかかる橋ゆえ両国橋ともいう。

(服部南郭) 江戸時代中期の詩人。名は元喬。字は子遷。十六才で柳沢吉保に仕えた。荻生徂徠の門弟。詩文をもって名高い。また和歌や絵画にも長じていた。

練吟メモ

音と訓（二）

○訓読には、漢字の訓読と、漢文の訓読と二つあります。漢字の訓読は前回述べたので、今回は漢文の訓読について説明するのが順序ですが、実は60年9月号の練吟メモで触れているのでここでは省略させていただきます。と言うのは、新教本の漢詩はすべて書き下し文となり、おまけに振り仮名がつき、詩文の読みは統一されました。従って、詩吟の教室では、訓読についての勉強は必要がなくなったと言えるからです。

○新教本は「書き下し文」であると申しましたが、これは教本〈本文〉の漢詩を訓読に従って仮名まじりの日本文（ただし、教本の吟符をとった文）に書き改めることを書き下すと言います。これに対し、漢詩を日本文にして読むことを「読み下す」と言っておりますので、使い分けて下さい。

○漢詩文を読むときは、読んで分りよく、口調もいいように適宜音と訓を併用しながら読むものだと言われています。次に、教本一「江南の春」の承句を例とします。

水村山郭酒旗風

1. 音読すると

スイソンサンカクシュキフウ

（意味不明、でも間違いとは言えない）

2. 訓読みすると

みずのむらやまのさとさかはたのかぜ

（大体意味はわかるが、口調も調子もよくない。でも間違いとは言えない）

3. 音と訓を併用する

スイソンサンカクシュキのかぜ

（スイソンサンカクでは「水村にも山郭にも」の意にやや遠いが、通じないことはない。酒旗風は「酒旗をそよがしむる風」という意味なので、酒旗の風だけではやや意味不明。しかし、むかしから学者により十分検討され、そして伝承されて来た動かない読みであると思います。

○以下は明治時代の余談、と言っても国の公文書からです（ふりがなは原文どおり）

1. 明治七年一月　太政官布告第五号

海上衝突予防規則（カイジョウショウトツヨボウキソク）

（うみのうへつきあたりえうじんのきまり）

2. 陸軍衛生法及救急法「花柳病」

鼠蹊淋巴腺（ソケイリンパセン）　接客婦（キャクフ）

（もものつけねのぐりぐり）　（しやうばいおんな）

3. 水族館（スイゾクカン）

（うおのやかた）

ぎんなん

人はみな体型や性格に相違があるように声もそれぞれ違いがあります。詩を上手に吟じるためには、自分の声にあった音の高さで吟じることが一番大切とされています。音程はご承知のとおり、男女の間では女性の方が高く、成人と子供では子供の方が高いのが普通です。一般的には男性の場合は水2本から5本で平均すると1本、女性の場合は5本から10本で平均すると6本、子供は男女とも5本から15本というデータになっています。

（入　会）

815 岡本和江　葉山町堀内三八一
（堀内・F）（電）〇四六八ー七五ー〇三七一

816 葉山寿美子　葉山町堀内一〇三一
（堀内・F）（電）〇四六八ー七五ー七二一三

ぬけるような秋空のもと、梢に残る赤い柿の実を鳥がついばみながら渡ってゆきます。秋は花より実の美しい季節…。又小学唱歌「冬景色」に〝げに小春日ののどけしや　かえり咲きの花も見ゆ〟とあるように、この時期は返り花が目につく季節でもあるようです。